



熊

久米正雄

北海道で生れた私の友達が、或日私の近所の子供たちの前でかういふ熊の話をして行きました。

熊といひますと、いふまでもなく恐しい猛獣ですが、熊だつて何も好き好んで人を殺すものではありません。人が熊を恐しがらうに、矢張り熊の方でも人が恐いのです。そして人が来るのを知れば、熊の方で先逃げてくれるのです。けれども両方がふいに出合ふか、どうしても顔を合せる外仕方のないやうな路でも出合ふと、熊も絶體絶命になつて、激しく襲ひ掛るのです。ですから北



海道(かいどう)の山道(やまみち)などでは、わざと人様(ひとさま)のお通り(おどおり)を知らせるために、豆腐屋(とうふや)かガタ馬車(ばしや)の御者(ごしや)が持つ、あの喇叭(らっパ)を吹いて歩くのです。夕方(ゆふた)の青い霧(きり)がかゝつた谷間(たにま)などを、郵便(ゆうびん)の遞送夫(ていそうぶ)が腰(こし)にはピストル(ピストル)をさげ、と／＼と、喇叭(らっパ)を吹き鳴らしながら、走つて行くのはなか／＼いゝものでございます。

私はある時(とき)、一人(ひとり)の行商人(たばかきんど)から、かういふ話を聞きました。その行商人(たばかきんど)は、十勝(じゆつ)の高原(たかげん)のあるところで、夕方(ゆふた)、道(みち)に行き暮(く)れてしまひました。足(あし)は疲れし、お腹(はら)は減(へ)るし、どこか人家(じんか)がないものかと思つて、なほも重(おも)たい足を引(ひ)き擦(こ)つて行きますと、その中に一面(ひつ)の唐黍(とうもろこし)畑(はたけ)の中(なか)へ出(で)ました。見(み)るとその畑(はたけ)の中に、何(なに)やら黒(くろ)く動く(うご)くものが見(み)えました。もとよりの人(ひと)の背(せ)よりも高(たか)い唐黍(とうもろこし)が茂(さ)つてゐるのですから、何(なに)ものだかはつきり分(わ)りませ(ま)せん。けれども唐黍(とうもろこし)畑(はたけ)の中(なか)に今(いま)時(とき)分(わ)るものは、まさか人間(にんげん)の外(ほか)にあらう筈(はず)はないと思(おも)ひました。それでやつと生き返(かへ)つたやうな思(おも)ひをしながら、人家(じんか)のあるなしでも尋(たず)ねようと

思(おも)つて、何(なに)氣(き)なしにその方(はた)へ近(ちか)よりました。するとその間(ま)が僅(わずか)か五(ご)間(ま)ほどになつて、よくその黒(くろ)いものを見(み)定(さだ)めますと、それは思(おも)ひなげない、「親爺(おやぢ)」ではありませ(ま)せんか。北海道(ほくかいどう)では熊(くま)のことを、俗(ぞく)に親爺(おやぢ)といふのです。

行商人(たばかきんど)はびつくりして立ち竦(すく)みました。それと同じに、熊(くま)の方(はた)でも、初(はじめて)めてこつちの姿(すがた)を見て、今(いま)まで舐(な)めずつてゐたほの赤(あか)い舌(した)の動き(うご)きを止(と)めて、きつとこつちを見(み)返(かへ)しました。さあ、かう顔(かほ)を見合(みあ)せてしまつては、もう逃(に)げやうも避(さ)げやうもありませ(ま)せん、行商人(たばかきんど)は一時(ひととき)まづ着(き)になつてしまひました。とたんに、彼(かれ)はふと神様(かみさま)のお啓示(おきせ)のやうに、大(たい)へんうまいことを思(おも)ひつきました。どうすることも出(で)来(こ)なくなつたやうな場合(ばあひ)、人(ひと)にはふいに意外(いがい)な思(おも)ひ付(つ)が浮(う)ぶものです。彼は手(て)に持つてゐた洋傘(やうさん)を、自分の體(からだ)の前(まへ)へばつとさしかけました。そして又(また)それをすつと拵(こしら)め、又(また)ばつと開(ひ)きすつと容(ゆる)めして、洋傘(やうさん)の陰(かげ)に身(み)をかくしながら、思(おも)ひ切(き)つて熊(くま)の方(はた)へ進(すす)ん



つてした。

これもある夕方です。いつも放し飼ひにしてある  
牝牛が、日暮になれば小屋へ歸つて来るのに、どう  
したものかその時戻りませんでした。

で、不思議に思つた牧夫は、まさかそんな大事が  
起つてゐるとは知らず、牧場の隅々を探しに出掛け  
ました。

すると、その牧場の片隅の、大きな立木の二三  
本ある陰で、牝牛が一匹の熊を相手に、ちつと睨み  
合ひをしてゐるぢやありませんか。

彼は驚いて逃げようといたしました。が、足が竦  
んで走れません。それにまたこの二匹の睨み合が、  
果してどうなるかと思ふと、こはいもの見たさに魂  
を奪はれ、幸に傍の立木の陰に身を寄せて、顔へな  
がら見てゐました。熊と牛とは互の争ひに氣を取  
られて、彼の見てゐるのなぞには氣が付きません。

熊と牛とは猶も永い間睨み合つてゐました。けれ  
どもその間に、牝牛は後足で土をしきりに掘つて、

も林のやうに静かなのです。やがて熊は思ひ切つた  
やうに、奮然と後足で立ち上ると、その右手を牛の  
左の角へぐいとばかりに掛けました。が、牛はまだ  
動きません。暫くすると、  
今度は熊がその左の手を  
牛の右の角へぐいと掛け  
ました。

するとそのとたんに、  
牛は待つてゐたと言はん  
ばかりに、全身の力を角  
に集めてぐいと熊の腹を  
突き上げました。ふいを  
食つた熊は、その角を避  
ける餘裕もありません。  
一突きつき上げてしま

つてからは、もう何と言つても勝負は牛のものです。  
一たん突き上げられた熊が必死になつて、掻き裂か  
うとするけれど、突き上げく體を進めて、殆んど



自分の足場がうまく据るやうに、土地に凹みを拵へ  
ました。そしてそれが出来ると、どつかとそこへ  
足を折つて坐り、身を沈めるやうにして、熊の方の  
近よるのを待ちました。

熊の方でも氣味が悪いから、おいそれとすぐ手出  
しはいたしません。牛の様子をちつと見てゐながら  
たゞ頭合を計るやうに睨んでゐるだけでした。

牝牛の方では戦闘準備が出来たから、もうちよつ  
とも動きません。たゞ赤く血走つた目を明けて、ち  
つと低い所から熊を窺つてゐるばかりです。熊は永  
い間睨んでゐましたが、もう自分の方から進まなけ  
れば、いつまで立つても罅が明かないと思つたもの  
か、今、ぢり／＼と牝牛の方へ、黒く重たさうな體  
を押し進めて行きました。

彼等はもう三尺ほどを隔て、向ひ合ひました。  
が、まだ熊は襲ひかゝりません。牛も黙つてゐます  
かうして、また五分間ほど睨み合ひました。まるで  
二匹の様子は、はち切れるほど力が這入つて、しか

熊の體が地につかぬ程手玉に取りながら、その喧嘩  
を始めた場所から四五間向うの、大きな立木の根元  
まで押して行きました。そしてその幹へ熊の體をぎ

ゆつと角で押しつけてし  
まいました。

かうしていつまでも動  
かないので、やがて恐る  
／＼牧夫が行つて見ます  
と、お腹を滅茶／＼に突  
き裂かれた熊を、しかと  
幹へ抑へつけた儘、いつ  
の間にか牝牛の方も死ん  
でをりました。さすがに  
強い牝牛さへも、その争  
ひに力を出し盡して、相

手が死んだのを見て取ると、ほつと安心して息が絶  
えてしまつたものと見えます。牧夫はそんな凄じい  
争ひを、生涯中に見たことがなかつたさうです。